昭和九年の〝昔はよかったなあ〟

―北小「六十周年記念誌」（昭和一〇年刊）に見る、別府の急激な発展への驚きと戸惑い―

小野　弘

はじめに

ことし（二〇一五年）は戦後七〇年ということで、あらためて戦後の歴史が脚光を浴びている。

戦災に遭わなかった別府には引揚者などが住む場所を求めて集まり、町がパンクするほど人口が急増。さらに占領軍のキャンプ建設や一〇年間にわたる駐留が、別府の戦後復興に大きな役割を果たした。

そして、日本全体の復興とあいまって戦後の別府の観光全盛期を迎えることになったわけだが、今回の小生の文章はあくまで戦前の別府の発展と、当時の人がそれをどう受け止めたかがテーマ。戦前と戦後の別府の歴史は、はっきりと区別した方がよいと考えているので、念のため前置きした。

一、別府駅と阪神航路が発展の契機

戦前の発展の一大契機となったのは、明治終わりの別府駅開業＝一九一一年（明治四四）＝と、翌年の阪神別府航路開設＝一九一二年（明治四五）＝による、交通機関整備であることは異論がないだろう。

それぞれ数年前に百周年を迎え、お祝いの行事が行われた。別府駅は亀川駅・東別府駅と三駅合同でささやかな式典で祝ったが、対照的に同じ年の開業である大分駅は大々的なイベントで賑わった。

初代紅丸が就航し大阪商船の阪神別府航路が開設されたことについては、フェリーさんふらわあが二年続けてキャンペーンを張り、ふだん夜間運航しているフェリーを日中に走らせる「昼の瀬戸内海航路」を復活させたのも記憶に新しい。

なお、発展の契機としてはこのほかに、日露戦争＝一九〇四―〇五年（明治三七―三八）＝の傷病兵が療養したことが、全国に別府の温泉の名前を広めたとも言われているし、ほかにもいろいろな要因はあるだろうと思う。

二、戦前のピークは昭和一二年

さて、一挙に年代が下って恐縮だが、一九二八年（昭和三）

の中外産業博覧会に続いて二度目の博覧会（国際温泉観光大博覧会）があった一九三七年（昭和一二）が、戦前の別府観光のピークだったと、識者からうかがったことがある。もちろん、別府生まれ・別府育ちの方だったので、その時代を生きた人の実感だったのだろう。一方で、この年は日中戦争の始まりの年でもあり、しだいに娯楽や観光どころではない時代へと入って行くわけだ。

三、一寒村があれよあれよの間に都会に

駅開業からこの年まで、単純計算すると二六年。わずかな間に急速な発展を遂げた別府に対して、当時の人々は一寒村に過ぎなかった別府があれよあれよという間に大都会に変化したと、一様に驚きを感じていた。同時に、失われたのどかな過去の風景に対してノスタルジーを感じていたようだ。

それがよくわかるのが、別府市北小学校同窓会「創立六十周年記念誌」＝一九三五年（昭和一〇）発行＝。明治期に子供時代を過ごし、別府の知名士などとして活躍している卒業生たちの思い出の文章が多数掲載されている。

北小学校が六〇周年を祝ったのは、前年一九三四年（昭和九）一二月のこと。掲載された文章のいくつかをピックアップして、当時の人々の思いに触れてみたい。

弁護士の中村守氏＝一八九八年（明治三一）三月、高等科卒業＝は

――一漁村たりし別府が其後交通機関の発達と共に今は世界の別府となりたる事も隔世の感がある――

竹細工工場を経営し市議会議長もつとめた手島森太郎氏＝一九〇一年（明治三四）三月、同＝は

――回顧すれば三十余年の昔、豊後の別府であつた小温泉町に市制布かれて早や満十年、今や泉都別府市は大別府の建設を目標に内容の充実を計り滾々と湧く無限の温泉と明媚なる大自然の風光に恵まれて国際的療養観光都市たらんとす――

竹製品卸の菅穀太郎商店（のちのスガコク）二代目の菅穀太郎氏＝一九〇二年（明治三五年）三月、同＝は

――物淋しく静かな、名も知られなかつた小さな別府は発展又発展、汽車が通じ汽船和船の出入たえまなく、其の名は日本全土は勿論、諸外国にまで知られる様になつた今と昔と

思ひ比べて唯々感慨無量であると云ふのほかない――

旅館筑紫館経営の田辺光由氏＝一九〇七年（明治四〇年）三月、同＝は

――其の後僅か三十年たらずの間にあの小さい町であつた別府が世界の泉都として市制を布き人口五万を数へ年間百数十万の浴客を迎ふる大都市にならうなど、は我々の想像だにしなかつた事である――

四、のどかだった昔への郷愁

いずれも寒村だった別府が急速な発展を遂げたことへ驚きを吐露しているが、その片方で都会化した別府に違和感を覚え、のどかだったかつての姿への感傷を綴っている人も多い。

永楽屋旅館経営の堀静夫氏＝一九〇〇年（明治三三）三月、同＝は

――シヤンデリヤのまぶしい光とネオンサインの交錯は荒びた昔の寒村の面影も止めず、松吹く嵐も神経を尖らせる都会の雑音に変化してしまつた――

大分運送株式会社支配人の野田得二氏＝一九〇四年（明治三七年）三月、同＝は

――僕等が小学校在学当時、誰かよく今日の別府に想到したらう？　豊後別府が九州の別府となり、日本の別府となり、今や世界の別府となつた。

別府が発展すればする程吾等は故郷別府の昔日の面影を偲び懐旧の情に堪へない――

さらに、旅館桝田屋経営の野田敏彦氏＝一九〇二年（明治三五）三月、同＝の場合は、実相寺山への遠足の楽しかった思い出や、山上から眺めた春木川や海岸線の美しさなどを細かく描き、「現在の騒然たる環境に比べて、私は此の造化の妙筆が又たまらなく慕はしく思われた」と述べ、また流川通りあたりについても「今のビリ軒（※ビリケン）横の名残橋や若亀前の新湯もあった、今は昔の悌もない湯の町別府は明治四十四年の鉄道開通を契期として発展の途上に乗出した」（※読みやすいように、原文のカタカナをひらがなに変えた）と記している。全体が一篇の詩のような調子で、現代の私たちにも当時（今から一二〇年近い昔）の別府の野山や海岸線を歩いてみたいと思わせてくれる文章となっている。

五、失われた自然を嘆く薬師寺氏

「六十周年記念誌」掲載の卒業生の文章は、いうまでもなく地元の人間の感想だが、合わせて紹介したいのが、ほぼ同

じ時期、一九三六年（昭和一一）一二月発行の雑誌「モダン別府」創刊号に、「ここは名高き流川…」などと有名な七五調の亀の井バスの地獄巡りを作った不老暢人（不老町人）こと薬師寺氏（亀の井自動車常務）がしたためた「別府の昔と今」の一文。油屋熊八と同じ、宇和島出身者である。

一九〇一年（明治三四）頃、若き日に初めて訪れて別府の自然の美しさを振り返り、すっかり埋め立てられてしまった白砂青松の海岸線や、大通りに整備される前の流川通りの風情などが失われたことを次のように嘆いているのも印象深い。

――五丁目の下角の日名子を界として、西は乙原の山麓まで田畑がつづき、ただ西法寺の伽藍だけが、日名子の附近に特立してゐたのが記憶に残ってゐる。其の流川通も、町を流れる小川は地下に通され、道路は拡張され舗装され、風にそよぐ柳はネオンに変り、大別府のメンストリートと成って十八丁目迄も直通し、昔の面影なぞは想像も出来ない。

（中略）

それより海浜伝ひの漫歩散策、北浜的ケ浜の一帯、白砂青松の間に魚家点存し、湯烟の処々に立ちのぼるなど、何とも言ひ得ぬ好風光、眼前には砂湯に浸る多くの浴客も見え、空には鴎の二羽三羽悠々と舞ひ、遙か霞の中に仄見ゑるは佐賀の関半島から四国の島山今に忘れられない好印象だ。

（中略）

だが、文化の暴威とでも云はふか、白砂の海浜は無粋に埋立てられ、松樹の林は残忍に切倒され、電車はレキロクの音を立てゝ此の風致を破壊し去ったけふ此の頃、海浜の漫歩散策など、昔を語るさへ無情な気がする。――

絵葉書に見る別府の発展

別府全景の絵葉書（明治 40 年以前）

明治 40 年以前の別府全景の絵葉書。手前は浜脇の海岸線で少し突き出ているのが朝見川河口のさんばし。画面奥の別府港は今はゆめタウンに変貌している。

当時の別府では大型施設だった不老泉（明治 35 年築、木造３階建て）から現在の別府駅方向へ向けて撮影している。現在とは全く違って、田畑だけが広がっている。手前は田の湯温泉へと続く道。

不老泉から山手を見た絵葉書
（明治 41 年の賀状として差し出されたもの）

明治 44 年以前の北浜あたり
（現在の北浜公園や北浜旅館街一帯）

別府港の北側の突堤から撮影していると思われ、埋め立て前の海岸と漁網を干す風景などが写っている。現在でいえば北浜公園や国道 10 号線。画面左端に見える森は海門寺と思われる。

今の駅前高等温泉あたりにあった北小学校は、別府駅開業に伴い移転を余儀なくされ、明治44年に現在のトキハ別府店の位置に移った。全校児童が整列している背後には、まだ国道10号線も北浜旅館街の埋め立て地もなく、そのまま海岸が控えていた。

駅開業で移転した北小学校
（背後に埋め立て前の海岸が見える）

明治44年7月16日に開業した別府駅

明治44年7月16日に開業した別府駅。駅舎の前に祝いの緑門が設置され、見物客が訪れている。駅前通りは整備されたばかりで、脇には大きな石がごろごろと転がっていて沿道に建物はまだ何もない。駅舎の背後にはうっすらとかすんでいるが鶴見岳などの山々がそびえている。

明治45年5月28日に初めて大阪―別府間を運航したくれなゐ丸は、約1400トン。もともと中国・揚子江航路に使用された北ドイツ汽船会社の「美順号」だったが、火災にあって、保険会社に委託されていたものを大阪商船が購入した。その頃、瀬戸内海航路では600トン級の香川丸、愛媛丸などがりっぱな船だったが、はるかに上回る大型船だった。

明治45年5月に就航した初代のくれなゐ丸（紅丸）

昭和 12 年に開催された国際温泉観光大博覧会

別府市主催の国際温泉観光大博覧会は昭和 12 年 3 月 25 日から 5 月 13 日まで当時の別府公園（現在のべっぷアリーナ一帯）で盛大に開催され、50 日間でのべ 50 万人もの来場者があった。写真は大がかりな正門の様子。

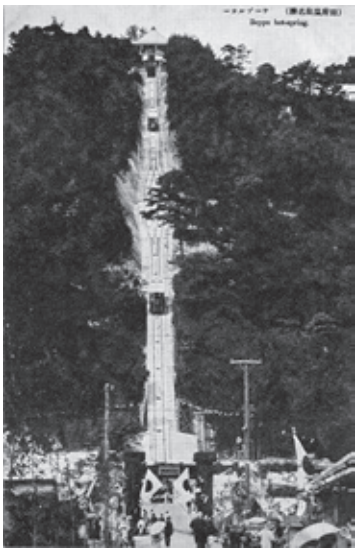
ネオンまたたく昭和 10 年頃の流川通り

昭和 10 年頃の流川通りを山手に向けて撮影した絵葉書。画面左端には中浜筋商店街入り口のアーチ、仁寿堂薬局、楠本町（戦後は楠銀天街）入り口、片桐時計店の洋風 3 階建てなどが見える。夜もあかあかと灯火がともり賑やかな様子に、作家織田作之助は「流川通は別府温泉場の道頓堀だ」（「湯の町」）と書いた。

電車が通る海岸通り（昭和 12 年頃か）

電車が軌道を走る海岸通りの絵葉書。画面右側の天然砂湯の建物は昭和 11 年 7 月に落成しているので、そのあとに撮影されたもの。画面左側には鶴萬旅館、4 階建ての児玉旅館が並んでいて、写真説明にも「温泉旅館櫛比する海岸通りの盛観」とある。

別府には女優歌劇が人気を博した鶴見園（大正15年開園）に続き、金山だった山を利用した遊園地ができ昭和４年にケーブルカー（戦後はラクテンチ）が開通した。写真は開通の日の賑わいの様子と思われる。

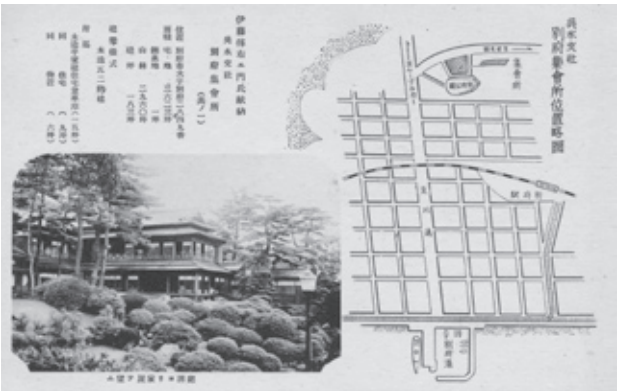


昭和４年に開通したケーブルカー

麻生別荘でのガーデンパーティーを楽しむ外国人客

戦前の別府は人気の別荘地でもあった。今は高級分譲地となっている山水園（麻生別荘）は筑豊の炭鉱主麻生太吉の別荘で、その庭園は世界周遊船が到着するたびに海外の乗船客が必ず訪れる場所だった。画面中央に４人少女の姿が見えるが、接待係をつとめた別府高女の生徒たち。

戦後ホテル赤銅御殿（あかがねごてん）として知られた、筑豊の炭鉱主伊藤伝右衛門が妻白蓮のために建てた別荘は、海軍に献納され呉水交社の別府集会所となった。大正10年世間を騒がせた白蓮事件の発端となった白蓮と宮崎龍介の出会いの場は大正９年のこの建物だった。



伊藤伝右衛門の別荘（戦後はホテル赤銅御殿）は
海軍に献納され呉水交社別府集会所となった